

曹洞宗に於ける祈禱の系譜と

その実態についての一考察

—曹洞宗伝道史研究序説(その二)—

峰岸秀哉

はじめに

道元禪師（一一〇〇～一二五二）の教法は只管打坐を標榜した純粹な出家道であつたので、一般民衆の志求に應じて諷経祈禱するか、追善供養を行なうといふことは全くなかつた。しかしこの生一本な出家道実践は禪師の滅後しだいに崩れ、瑩山禪師（一二七八～一三二五）に至つては只管打坐の強調、修証一如の純粹禪を本領としながらも、密教的要素が多分に摂取され、現世利益を祈願する祈禱が重要な比重を占めるようになった。この瑩山禪師の密教思想を更に上回り、毎日の如く諷経祈禱を行なつたのは面山端方（一六八三～一七六九）である。

そこで小論に於いて『正法眼蔵』、『永平清規』、及び『瑩山清規』、『僧堂清規』の諷経祈禱を比較対照して、その相違点についていささか論じてみたいと思ふ。尚、紙数の関係から概略だけ記す。

(一)

道元禪師が制定した『典座教訓』に、「扱_レ米扱_レ菜等時。行者諷経。回_三向_三竈公。」とあり、『知事清規』には「所謂諷経者。安樂行品。金剛般若。普門品。楞嚴咒大悲咒。金光明空品。永嘉証道歌。大滄

警策。三祖信心銘等也。随宜而諷経。回_三向_三竈公也。回向云。上來諷誦某経。又云上来諷誦功德。回向当山竈公真宰。護法安人者。十方三世一切諸仏。云々」とあつて、竈公に回向し、それに向つて護法安人を祈ることが論じられている。また『正法眼蔵安居』の衆寮諷経には「四月十三日の齋罷に、衆寮の僧衆、すなわち本寮につきて煎点諷経す、寮主ことをおこなふ」と規定されている。これは結制安居にはその無事安隠と弁道の増進を祈り、解制にはそれを謝するのであつて、諸天善神に対する祈願である。『知事清規』には「今叢林三八念誦罷猶參。此其原也」とあつて、三八念誦が行なわれ国土安隠と弁道の無事を祈つたことを推則することができる。その他、結制解制と冬至歳末の四節に行なわれる祈りである土地堂念誦。皇帝の誕生日にあたり、一ヵ月前から毎日若干僧をして輪次に仏殿で看経させ、当日の祝聖上堂を以て終りとする聖節看経がある。更に園頭という役職が、菜園を耕作して蔬菜を大衆に供する最難極苦の役であるところから、特に道心ある者を選んでこれに充てるとともに、常に敬虔の念を以て勤務すべきことを説いて、「在三菜園。朝晩焼香。礼拜。念誦。回_三向_三竈天土地。不_レ曾懈怠。」と命じている。このように道元禪師も祈禱を行なつてゐる。しかしだからといつて、それが密教思想に基づく祈禱であつたとはいえない。禪師としては諸天善神をして護法正法の誓願を果たし、清衆の弁道安隠、ないし山門の安泰のための祈願を行なつたのであろう。

(二)

次に瑩山禪師と面方端方について論述してみるに、両祖師共に只管打坐の仏法を強調することは道元禪師と変わりませんが、『瑩山清規』や『僧堂清規』には多くの諷経祈禱や回向文の規定があるので、

只管打坐の宗格は諷經祈禱、供養回向の宗門となつた感すらある。

前述の如く道元禪師の場合は、諷經祈禱も清衆の辨道安隱ないし、山門の安泰であつて、出家仏教の範疇を出ていないが、瑩山禪師・面方端方の場合は右の外、民衆すなわち外護檀信の福祉のための祈禱にまで拡大され、更に先亡精霊に対する追善供養のための諷經も、しばしば行なわれることになつたのである。

その上瑩山禪師、面山端方は密教的性格を多分にもち、經典の咒術性を承認していたように思われる。

試みに『瑩山清規』の「居常粥了諷經回向文」をみると、

上來諷誦神呪功德。回向真如實際無上仏果菩提。祝獻護法竜天護法聖者。三界万靈十方至聖。日本国内大小神祇。当山土地当山竜王。護伽藍神。十八善神。招宝七郎大権修理菩薩。白山八幡監齋使者。

多聞迦羅稻荷神等。合堂真宰。今年歳分主執陰陽權衡造化。南方火徳星君火部聖衆。所集殊勲。祝獻本寺檀那十方施主。合山清衆本命元辰。当年風星守道守宮一切聖造。所翼。山門鎮靜。修造無歎。十方施主福壽莊嚴。法界衆生同円種智者。十方三世云々。(『僧堂清規』の「仏殿粥了諷經」も同様)

とあつて、仏法守護の諸天善神は勿論、民族習合による菩薩、古來からの日本神祇、村落共同体の土地につながる神祇、星宿、禁忌などの陰陽道の思想と考えられるものなど、様々な信仰を採用していることは、瑩山禪師、面山端方共に俗信仰を混入した密教思想が、多分に存するといえよう。

ここで考えなければならぬことは、何故、瑩山禪師が密教思想を自己の宗教に導入したかということである。これは十三世紀後半において、臨済系の京都の密教禪と鎌倉の宋朝禪、即ち明庵派、聖

曹洞宗に於ける祈禱の系譜とその実態についての一考察(峰岸)

一派、法灯派が隆盛を極めていたからではないだろうか。従つて瑩山禪師は永平寺の社会的興隆を策した義介の意志を受けるとともに、自らも禅密兼修派の禪匠に参することによつて、密教的要素を自己の宗教に導入して寺門興隆発展を計らうとしたのであろう。

さて面方端方の『僧堂清規』を見ると、一日として祈禱諷經の日は無いついほどであり、その回向文を見ると、その密教思想は瑩山禪師に勝るとも劣らないものがある。更に法式を整備し、瑩山禪師の甘露門があるのに、それよりも整備拡大した甘露門を作成し、施餓鬼法会を盛んにした等の点から、瑩山禪師の宗風宣揚にあずかつて力あるものといえよう。従つて諷經祈禱は瑩山禪師に始まり、面山に到つて頂点に達したといえるのである。

(三)

以上より瑩山禪師以後、坐禪専修の宗門の多くが諷經祈禱の宗門となり、自己心中の仏を自覚する本来の立場は心外の仏を拜するようにもなつた。そして禪門規式の住持即本尊の建前は失なわれ、本尊は功德利益の主体となり、雲上の存在となつた。かくして住持人は仏に代わつて化儀を挙ぐるという禪門独自の立場よりも、山門繁栄、弁道安隱、国家昇平を祈願したりして、功德利益を媒介する取次人になつたともいえる。また經典に咒術性が付与されて、古教照心の看經は一変して功德利益を目的とした諷經回向にもなつた。

しかしそれは曹洞宗をして、日本最大の宗派たる教線を拡張する一要因となつたといえよう